

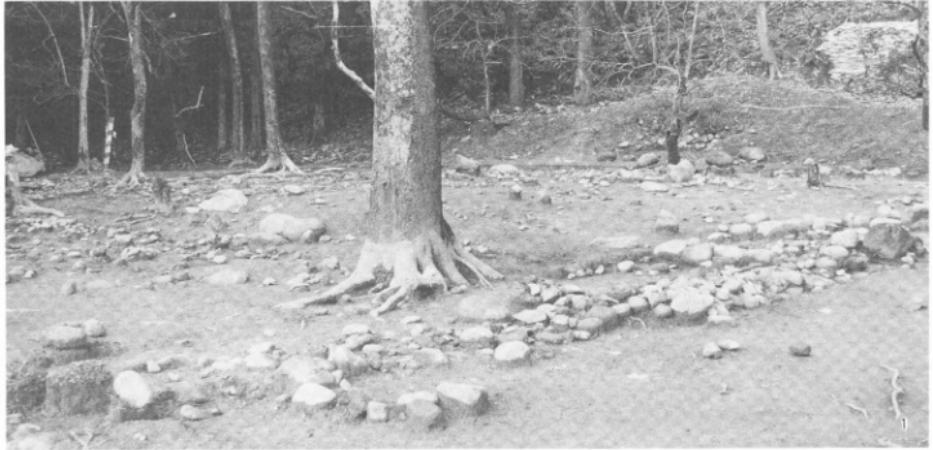


1

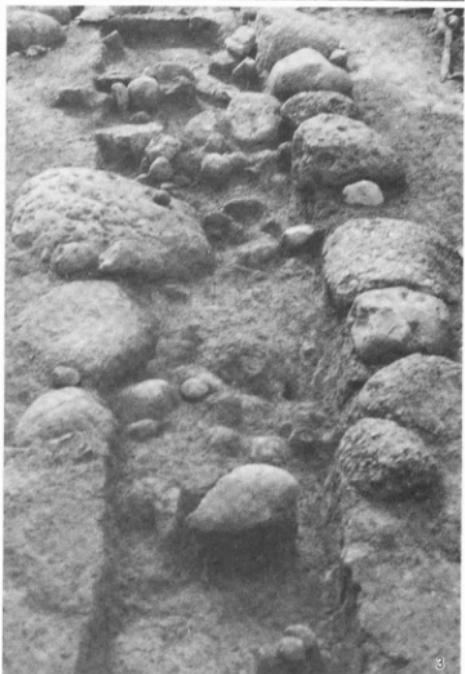


2

図版10 1.本堂跡（南より）, 2.本堂跡（南東より）



図版11 1.溝跡（南より）, 2.溝路中央部分（南西より）, 3.溝跡中央部分（南より）



図版12 1.溝跡全景（南東より）, 2.溝跡南西部分（南西より）, 3.溝跡南西部分（北東より）



1

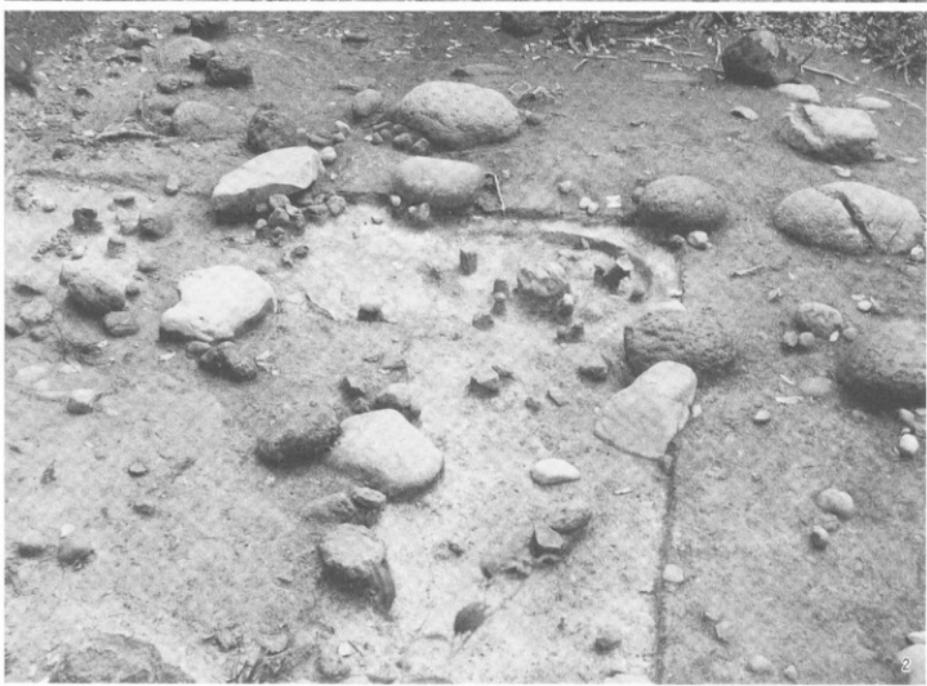


2



3

図版13 1.本堂中央部（南西より）, 2.本堂西南部分（南西より）; 3.溝跡南東部分（南西より）



図版14 1.平坦面3（塔跡）全景（北西より・空中写真），2.塔跡（北東より）

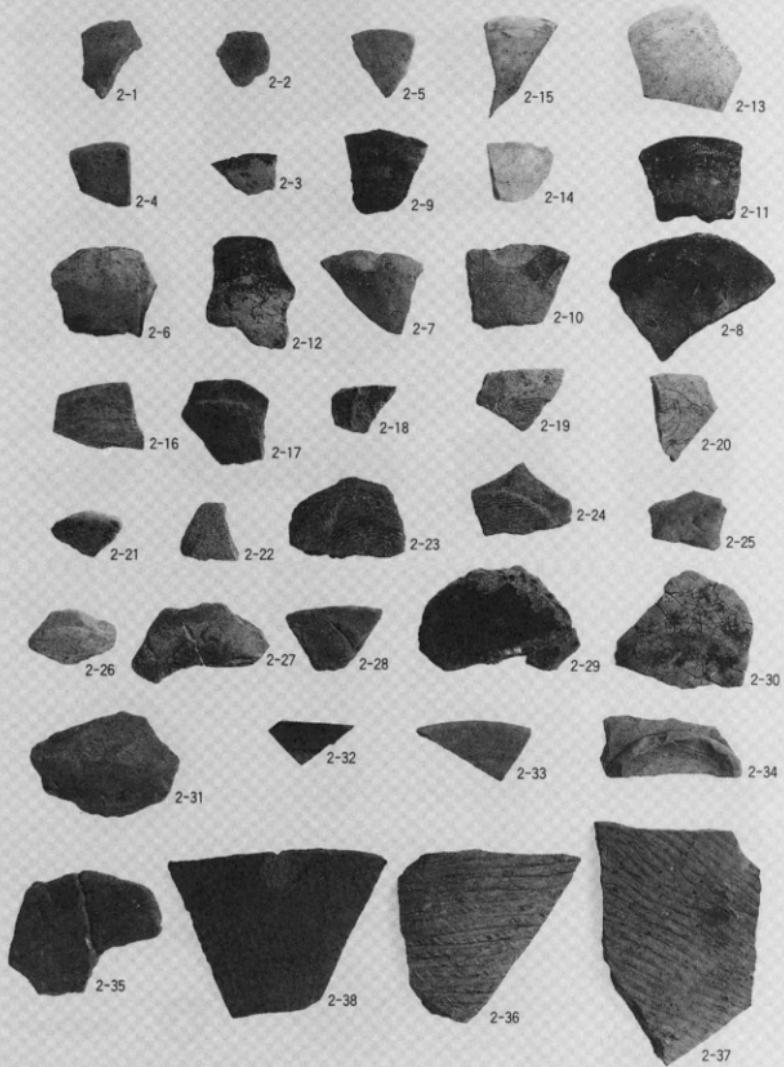


図版15 黒川地区周辺遺跡 1.平坦面6の石組。2.平坦面6の墓群。3.平坦面6の遺物出土状況。4.平坦面11の八幡社。5.八幡社の石段

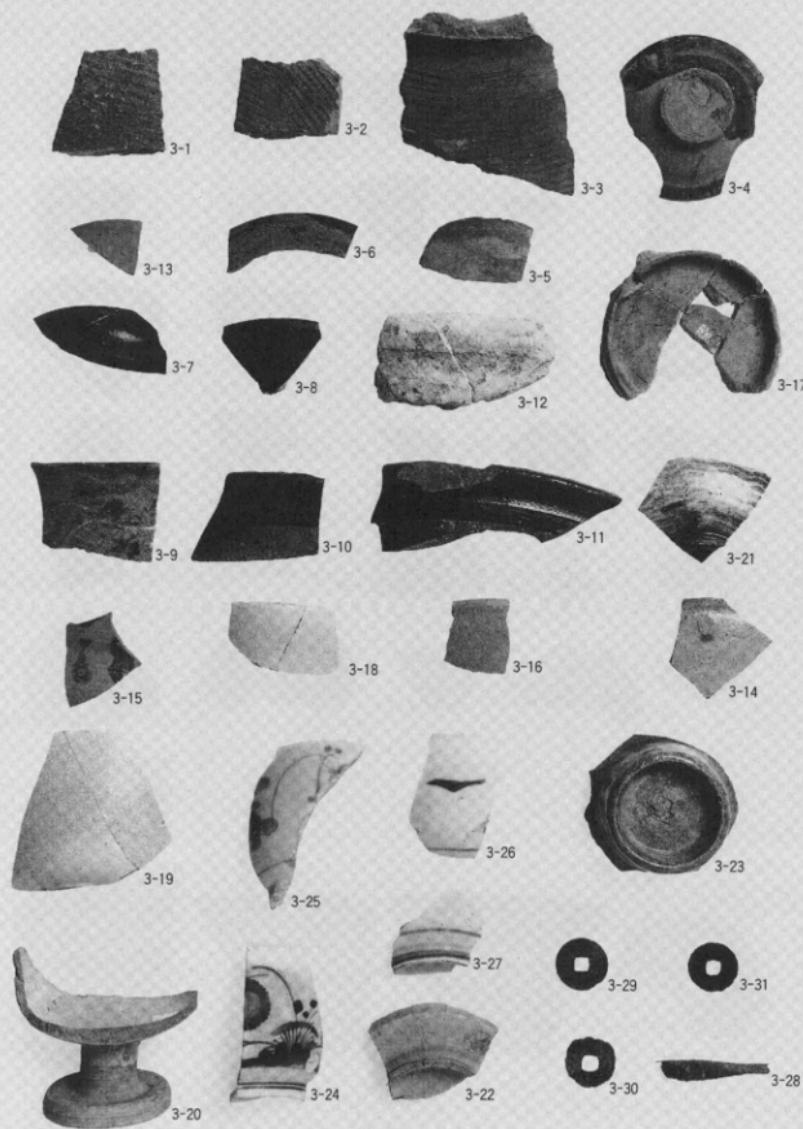


図版16 黒川周辺遺跡 1.平坦面11の八幡社横の集石, 2.平坦面12の墓域, 3.平坦面12の墓域(古い地割が残っている),

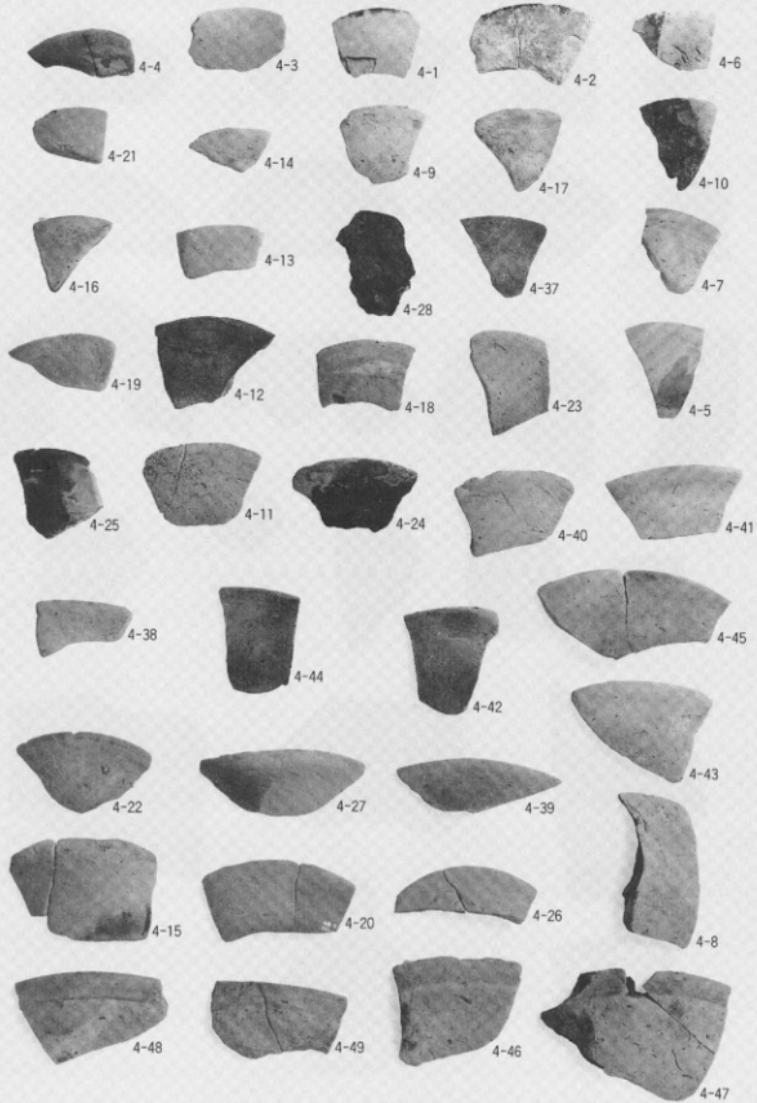
4.平坦面12の実測風景, 5・6.真興寺作業風景



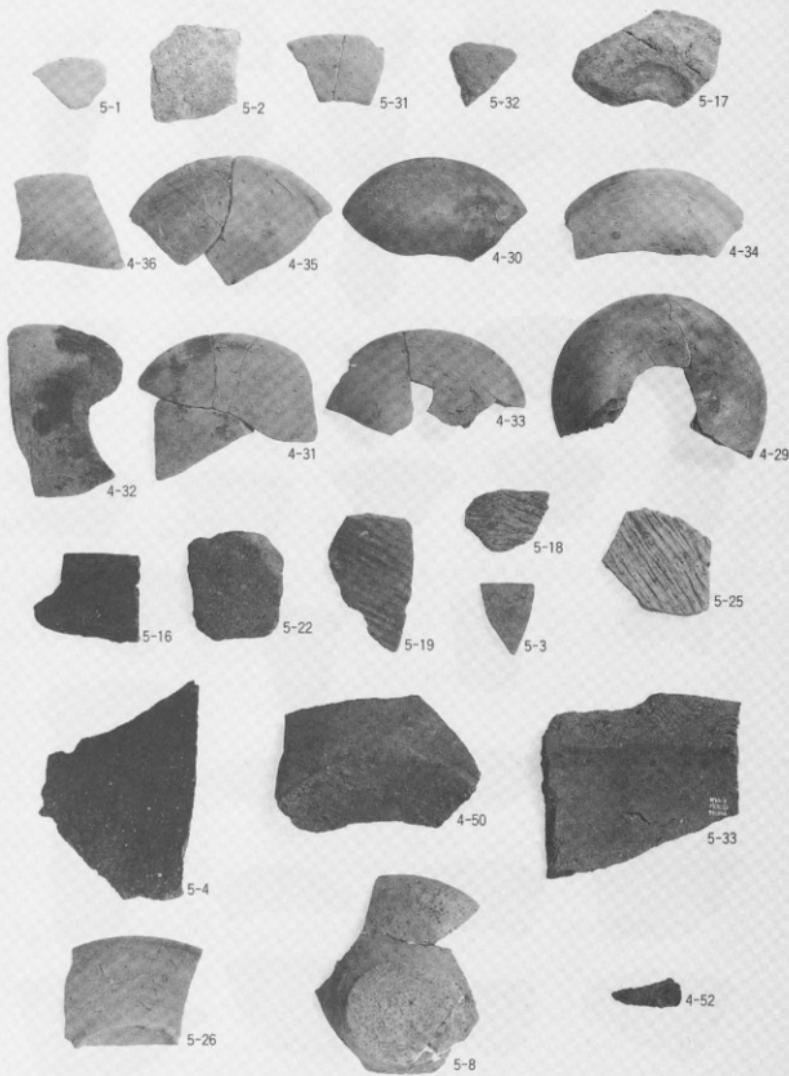
図版17 遺物写真 (縮尺1/2) 平坦面1-I (本堂跡) 出土 (図版2参照)



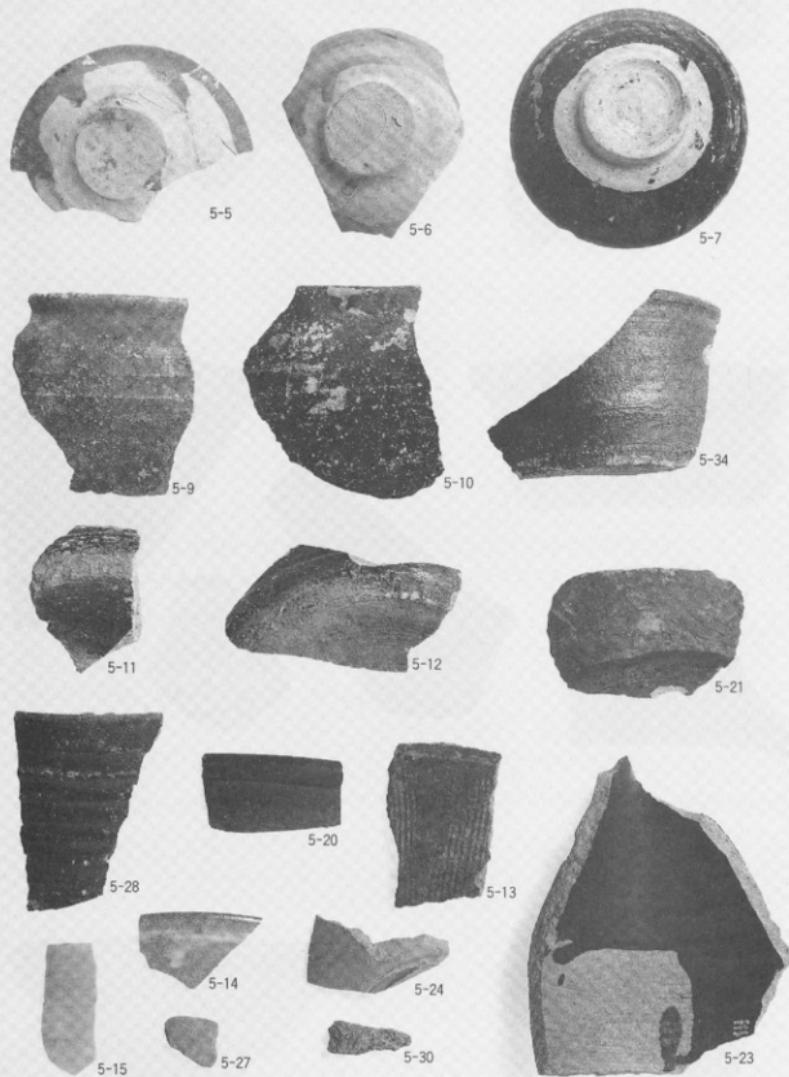
図版18 遺物写真 (縮尺1/2) 平坦面1-1 (本堂跡) 出土 (図版3参照)



図版19 遺物写真 (縮尺1/2) SK1出土 (図版4参照)



図版20 遺物写真 (縮尺 1/2) SK 1・平坦面 I-II・平坦面 I-IV・石道・参道・横穴出土 (図版4・5参照)



図版21 遺物写真（縮尺1／2）平坦面1—III・平坦面1—IV・平坦面3（塔跡）・石壙・湧水地出土（図版5参照）



4-51



5-29



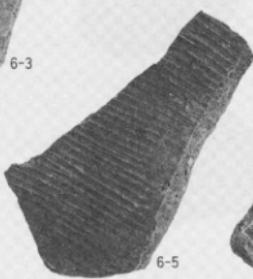
6-3



6-6



6-7



6-5



6-4



6-1



6-2

図版22 遺物写真 (縮尺 4-51・5-29:実大, 6-3~6-7: 1/2, 6-1・6-2: 1/3)

SK 1・平坦面3(塔跡)出土, 分布調査採集遺物(図版4・5・6参照)

## IV 調査結果

### 6. 平成12年度の調査

(1) 日枝神社裏遺跡の調査	255
(2) 円念寺山遺跡の調査	258
(3) 分布調査(黒川地区穴の谷塗場周辺)	261
(4) まとめ	262
引用・参考文献	263

### 挿図・図版等目次

第1図 日枝神社裏遺跡遺構全体図	264	図版1 日枝神社裏遺跡・円念寺山遺跡周辺航空写真	274
第2図 日枝神社裏遺跡遺構実測図(平坦面1、SK1)	266	図版2 遺物実測図	275
第3図 日枝神社裏遺跡遺構実測図(石列)	268	(日枝神社裏遺跡 平坦面1~5、集石1~4、SK1)	
第4図 円念寺山遺跡遺構全体図	270	図版3 遺物実測図	276
第5図 黒川地区周辺遺跡(塗場関係)分布図	272	(日枝神社裏遺跡 平坦面1~3、集石1) (円念寺山遺跡 集石11~16・17~26・28)	
		図版4 遺物実測図	277
		(円念寺山遺跡 集石13~16・20~21・24~27・29~30、平坦面1)	
		図版5 遺物実測図	278
		(円念寺山遺跡 集石2~8・19~20・24~25・29、平底面2)	
		図版6 遺物実測図	279
		(円念寺山遺跡 集石29~30、H11分布調査遺物)	
		図版7~11 遺構写真	280~284
		図版8~18 遺物写真	285~291

## (1) 日枝神社裏遺跡の調査

### 1. 遺構（第1～3図、図版7・8）

日枝神社裏遺跡は、平成10年度の分布調査で確認した遺跡である。遺跡は、上山古墓群の西約50m、日枝神社の背後に広がる標高51mから57mの平坦面であり、日枝神社の社域・畠を含めて大小17ヵ所に及ぶ。今回の調査は、現在は杉の植林が行われている5ヵ所の平坦面を対象とした。そのうち2ヵ所の平坦面は山地を開削して作り出されたと考えられる。全体に畠の耕作による削平を受けているものの、集石・石列などが確認でき、調査はそれらを中心に行なった。この他の遺構としては礎石・土壙などを検出した。

#### 平坦面1（第1・2図、図版7・8）

平坦面1は、X79222～79235、Y21232～21260に位置する。面積は約200m<sup>2</sup>である。山地の斜面を開削して平坦面を作り出しており、山裾に三方を囲まれ台形状を呈する。平坦面2とは約1mの段をなしている。表面の腐植土を排除すると、褐色砂質土の上に集石・小礎及び礎石と考えられる約30cmから約60cmの石が検出される。礎石には平坦面の長軸に平行するラインを結ぶものも見られる。しかし、後世の畠作などによる土地利用によって移動し原位置を保っていないものも多いと考えられ、建物を復元することはできなかった。主に平坦面南端に沿って見られる集石には、近現代の瓦、陶磁器などが混入しており畠作のために寄せられたものだと考えた。

集石1は平坦面1の西端に位置し、表面の腐植土と積み上げられた小礎を排除することで検出される。平坦面1の西側は幅が狭くなり、ゆるやかなスロープ状に平坦面3につながるが、集石1はその部分を方形に区画するように敷き詰められており、特に南西の角は直角を意識しているように見受けられる。この場所が平坦面1への入口のような役割を果たしていたのではないだろうか。また、集石1上に積み上げられていた小礎や平坦面上に見られる集石は、元来集石1のように平坦面に敷き詰められていた可能性を考えることもできる。

集石2は、平坦面1の北西に位置し20cm前後の礎からなる。集石2の北辺・西辺は直線を意識しており、平坦面・礎石のラインに向きを合わせるため、建物の北西隅の礎石あるいは根石に当たるものと考えられる。

平坦面1では礎石・集石が検出される褐色砂質土を約20cm掘り下げることで淡黄色の地山面に至るが、平坦面のはば中央にトレンチを設定して褐色砂質土を掘り下げたところ、地山を掘り込む土壙2基を検出した。SK1は、長径2.85m、短径1.65m、深さ0.43mを測る不整格円形の土壙で、底面はほぼ平らになる。埋土は炭化物が混入するきめの細かい明黄褐色砂質土である。埋土中から珊瑚焼の甕の部体破片が折り重なるように出土している。その他、埋土中から皇宋通宝・鉄釘・銅製の鏡、底面の直上から土師器皿が出土している。土壙上に何らかの施設があり、地鎮あるいは鎮壇の儀式を行なった可能性が考えられる。SK2は、長径1.24m、短径0.9m、深さ0.69mを測る円形の土壙で、SK1上から掘り込まれている。出土遺物はないが、埋土中に20cm前後の礎が混入している。土壙を検出したトレンチからは、地山を掘り込んで設置された礎石も検出している。

以上から、平坦面1には、地山直上に礎石建物や土壙が築かれた時期と、褐色砂質土上に礎石建物が築かれた時期の、少なくとも2段階の時期があるものと考えられる。

#### 平坦面2（第1・2図、図版8）

平坦面2は、X79208～79224、Y21230～21268、平坦面1の南側に位置するくの字形の平坦面のうち、平坦面1に平行する地区である。面積は約400m<sup>2</sup>、平坦面1との比高差は約1mである。ほぼ中央に南北方向にのびる高さ最大20cmの段差がある。段差の南端には径約80cmの巨石が置かれる。

調査は平坦面1の裾際にトレンチを設定して行なったが、その結果この平坦面は大規模な造成・整地を行なっており、2段階の時期があることを確認した。現在見られる平坦面は地山を削って造成された平坦面の上に厚さ約90cmの盛土

をして造成している。この造成土は平坦面1を開削した際の土砂を用いている可能性が考えられる。下層の平坦面は、平坦面1との比高差約1.8mを測る。地山上で土師器皿を検出している。上層の平坦面では集石3・30cm前後の石・小礫を検出した。

集石3は、直徑60cmのはば円形の集石で、根石だと考えた。礫の大きさは5cmから10cmで越中瀬戸の皿が混入する。

#### 平坦面3（第1・3図、図版7）

平坦面3は、X79188～79230、Y21210～21240、平坦面1の南側に位置するくの字形の平坦面のうち、平坦面1に直交する地区である。面積は約600m<sup>2</sup>である。山地を開削して平坦面を作り出していると考えられる。石列が確認されるほか、山裾にマウンド状の張り出しが2ヶ所見られる。

石列は、平坦面3の東寄りに位置し、長さ19.5m、幅1.3mを測る。平坦面の長軸からはややずれるが、集石1の西辺の延長線上でほぼ南北のラインに一致する。土壘状の盛土の上に小礫を積み重ねており、その中に径80cm前後の4つの巨石をほぼ等間隔に並べている。表面の小礫は一部後世の畑作により集めた礫が重ねられているが、4つの巨石を含めてほぼ原位置を保っているものと考えられる。4つの巨石からは被熱が確認できる。根石は無く地山に直に置かれている。石列の西側からはまばらではあるものの集石が検出されたが、東側からは集石は検出されなかった。このことから集石は平坦面3の何らかの施設に関わるもので、石列はその施設を区画するものだと考えられる。石列の周辺から土師器皿・須恵器・寛永通宝などが出土している。

平坦面3から平坦面4・5にかけての斜面の一部で、石垣状に組まれたこぶし大から径80cm前後の石を確認した。現在では崩落したものも見られるが、斜面全体に石が組まれていた可能性が考えられる。

#### 平坦面4・5（第1図、図版8）

平坦面4はX79172～79191、Y21210～21230、平坦面3の南側に位置し、面積は約180m<sup>2</sup>、平坦面3との比高差は約2mである。南東側へゆるやかに傾斜しながら高さ約50cmの段差をはさんで平坦面5に至る。平坦面5はX79165～79185、Y21221～21240に位置し、面積は約120m<sup>2</sup>である。平坦面4の最高所と平坦面5の最低所の比高差は約1.7mである。遺物は表土より土師器皿が出土している。

集石4は、平坦面3・4から西側のテラス状の小平坦面にかけての斜面に占地する。礫は敷き詰められているように見え、平坦面3と平坦面4をつなぐ通路の石敷である可能性がある。集石4の横に長径1m、短径70cmの巨石が置かれている。この巨石は全体に被熱しているが、平らな面に柱の跡だと考えられる径約25cmの円形の赤化が確認でき、礫石として使われていたと考えた。この巨石を含め、遺跡全体で径80cm前後の巨石が12個存在するが、これらは礫石が掘り起こされたものである可能性がある。

## 2. 遺物（図版2・3・12～14）

調査により検出した遺物は、土師器皿・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸などである。ほとんどの遺物は表土を排除し遺構面を検出する際に出土した。S K1からは同一個体の珠洲焼の壺体部破片が折り重なるように出土したほか、銅製の鉢が出土した。以下、遺構ごと、図版ごとに遺物の特徴を述べる。

#### 平坦面1出土遺物（図版2・3・12～14）

図版2の1～18、図版12の①～⑥は土師器皿である。このうち図版2の3・7・8・11～15・17、図版12の③～⑥は集石1から出土した。1～14は口縁部で、口径は8～14cmである。2・4・7・14は外表面にタールが付着する。1～4は口縁端部がややとがる。5・6・9・10は口縁端部をつまみ上げる。6・9・15・18はロクロ成形である。18は磨滅が著しいが、底外面に回転糸切り痕が残る。図版2の30は水滴だと考えられ、磁器製でうさぎあるいは猫のような動物を

かたどる。図版3の3～8・10・11は珠洲焼である。このうち6・8は集石1から出土した。3は壺の口縁部で、口径は50.4cmである。外面は口縁部直下から平行叩きを施し、内面は不定方向の撫でを施す。平行叩きは3cmあたり8日と粗い。珠洲焼の編年のV期に属すると考えられる。4～7・10は壺ないし壺の体部破片である。5・7は3と同一個体と考えられる。8・11は擂り鉢である。8は内面におろし目が残る。11は底部で、底径は13.6cmである。器体は直線的に開く。図版2の12・13は擂り鉢である。12は底径11cmである。内面におろし目、底外面に回転糸切り痕が残る。外面に銹軸を施す。平坦面2のトレンチ中から出土した破片と接合した。13は底径9.0cmである。おろし目は摩滅が著しい。内外面に銹軸を施す。図版3の14・15は越中瀬戸の匣鉢である。14は口径16.2cmで口縁端部は平縁に成形する。15は口径13.8cmで口縁端部に段差を持つ。体部は直立し筒状を呈する。ロクロ目が明瞭に残る。14は内外面に銹軸を施す。15は外面に銹軸を施し、内面は無軸である。17は寛永通宝である。

#### S K 1 出土遺物（図版2・12・13）

図版2の28・29、図版12の～は土師器皿である。いずれもSK1の底面直上から出土した。28は口径10.2cmを測る。非ロクロ成形で口縁端部はやや外に開く。～は28の同一個体の破片である。29は底部で、非ロクロ成形である。～は28・29とは別個体の破片である。図版2の34～39は埋土中から出土した。34～36は鉄釘である。いずれも銹が著しいが、角釘で頭部は折り曲げた形態のものである。37は銅製の紙だと考えられる。東部の直径は1.7cm、軸の長さは0.8cmを測る。頭部表面にはわずかに銀金が残る。38は皇宋通宝である。39は珠洲焼の壺である。5cm大から15cm大の破片が折り重なるように出土した。外面の平行叩きは3cmあたり13日と細密である。

#### 平坦面2出土遺物（図版2・12）

図版2の19～21、図版12の⑦～⑪は土師器皿である。19は口径8.0cm、20は口径9cmを測る。ロクロ成形である。いずれもトレンチ中から出土した。21は底径6.0cmを測る。下層の平坦面の地山直上から出土した。その他、図版3の12の越中瀬戸擂り鉢の破片がトレンチ中より出土している。

#### 集石3出土遺物（図版2・14）

図版2の33は越中瀬戸の皿である。集石3の窯中から出土した。底径は4.2cm、断面が逆三角形を呈する付高台で、体部上半には灰釉、体外面下半・見込みには銹軸を施す。

#### 平坦面3出土遺物（図版2・3・12～14）

図版2の22～24、図版12の⑫～⑭・⑯～⑯は土師器皿である。22は口径10.8cm、器高2.3cm、底径6.3cmを測る。非ロクロ成形で口縁端部にヨコナデ調整を施す。23は口径9.0cm、24は口径8.0cmを測る。非ロクロ成形である。図版3の1・2は須恵器である。1は杯蓋で、口径は12.8cmである。口縁端部は外反し、内外面はロクロ撫で調整を施す。2は壺の体部破片である。外面に平行叩き、内面に同心円文を施す。その他に図版3の9の繩文土器が出土している。図版3の16は越中瀬戸の匣鉢である。口径16.4cmで、体部は直立し筒状を呈する。ロクロ目が明瞭に残る。外面に鉄軸、内面に銹軸を施す。口縁端部は平縁に成形し、無軸である。18は寛永通宝である。図版13の①は銭鉢である。銘の付着が著しく銭名は判読できない。

#### 平坦面5出土遺物（図版2・12）

図版2の26・27、図版12のは土師器皿である。26は口径10cmを測る。内外面にタールが付着する。非ロクロ成形で口縁端部はとがる。27は口径11.8cmを測る。非ロクロ成形で口縁端部をつまみ上げる。は底部破片である。

#### 平坦面5出土遺物（図版2・12）

図版2の25は土師器皿である。口径は8.0cmを測る。非ロクロ成形で口縁端部が外に開く。

#### 集石4出土遺物（図版2・14）

図版2の32は越中瀬戸の丸碗である。口径9.4cm、器高6.6cm、底径4.4cmである。体部下半は丸みを帯び、口縁部は

ややすばかりながら直線的に立ち上がる。削り出し高台である。体部には鉄軸を施し、高台は無軸である。図版12の・は土師器裏の破片である。は内面にロクロ撫で調整を施す。

#### 表探遺物（図版2・14）

図版2の31は調査区で採集した砥石である。現存長は12.5cmを測る。欠損するが各面に使用痕が残る。

## （2）円念寺山遺跡の調査

### 1. 遺構（第4図、図版9・10）

円念寺山遺跡は、平成11年度の分布調査で確認した遺跡である。遺跡は、X78986～78956、Y21320～21410、上山古墓群の南、標高83mから87mの円念寺山の尾根上に位置し、大小3ヶ所の平坦面からなる。総面積は約1000m<sup>2</sup>、全長は90mに及ぶ。遺跡からは上山古墓群・塚跡東遺跡・伝承真興寺跡・日枝神社裏遺跡を一望することができ、東には頬岳を仰ぐ。特に尾根の先端からは、西に黒川の集落を見渡し、さらに富山平野・富山湾を遠望することができる。

今年度の調査では、腐植土を排除して遺構を確認することを目的とした。平坦面1は平坦面2・3より高所に位置し、平坦面からだらかに下る細尾根沿いにびっしりと集石が連なる。尾根の先端には集石に接して石を組んだ石棚が露出している。平坦面2・3は後世の畑作により削平を受けていると考えられるが、北側の崖沿いに畝状に集石が残っている。平坦面3は現在は杉の植林が行われている。

#### 集石（第4図、図版9・10）

平坦面1で18基、平坦面2で1基、平坦面3で11基、計30基の集石を確認した。平坦面1の集石は平坦面から尾根沿いに位置し、平坦面2・3の集石は北側の崖沿いに位置する。これらは集石墓・葬塚などの可能性が考えられるが、今年度の調査ではいずれか確定できなかったため、盛上が主体となるものも含めてすべて集石として扱うこととした。

平坦面1から尾根の先端にかけて、18基の集石がほぼ一直線に連なる。この集石群には、積石をするもの、墳丘状の盛り上がりを持つもの、方形に区画するものなどいくつかの種類が確認できた。

集石1～12は、約3mの高低差を持つ細尾根沿いに築かれた集石である。集石1は、尾根の先端に位置し、積石を行なうものである。50cm大のやや平坦な石を小口を意識して2段に積む。平面形は長方形であるが、途中で屈曲しへの字形になる。南西の角に石棚が露出している。集石2は、集石1の東側に接し、方形に区画するものである。南側には40cm大の石を段状に並べており、その上の表土中から刀子が出土した。集石6は、尾根を分断する溝状の地形を埋めるように石が配されている。集石7は、北側に50cm大の石を一列に並べ、全体では方形を意識している。集石8は、40cm大の石による南北2列の石列で外側を区画し、内側は5cmから20cmの礫が積まれている。区画の中央には約10cmの盛上の下に石棚が埋設されている。また区画の西辺中央からは刀が斜めに刺さった状態で出土した。集石11は30cm大の石と小蝶を積み重ねた方形の集石で、集石中から珠洲焼の壺・擂り鉢の破片が出土している。

集石13～18は平坦面1に築かれた集石で、それぞれ方形を意識している。後世の畑作で平坦面2が造成された際に一部削平を受けていると考えられる。集石上に珠洲焼の壺・擂り鉢の破片が散布している。

集石19～30は平坦面2・3の北側の崖沿いに立地する集石である。その内、集石22・24はマウンド状の盛土の上に集石が確認される。集石29は、畝状の集石からつながる高さ約70cmの上段状を呈し、その上に集石を施す。現状では崖側は崩落しているためわかりにくいか、集石は方形を意識しているようである。昨年度の分布調査ではその崩落した崖側から珠洲焼の壺・擂り鉢を採集している。集石30も集石29と同様に崩落はしているものの、方形を意識していると考えられる。集石上に珠洲焼の壺・擂り鉢の破片が散布している。

### 石櫛（第4図、図版10）

2基の石櫛を確認した。上部が露出した石櫛1、集石の地下施設である石櫛2という違いはあるが、両者とも1辺が約50cmで、平らな側石を用いて方形に囲む構造を持つなど、共通点が見られる。

石櫛1は、尾根の先端に位置し集石1に隣接する。石櫛の幅は約55cmで、厚さ20cm前後の側石を配し約25cm四方の石室を構成する。上部約30cmが露出しており、内側は5cm大の礫が混じる黄褐色土で埋まっている。

石櫛2は、集石8のほぼ中央を掘り下げることで検出した。集石8の地下施設であり、石列と軸を合わせている。石櫛の幅は約50cmで、厚さ10cm前後の5枚の側石と、平坦な底石で約22cmの石室を構成する。石櫛内部は20cm大の石と黄褐色土で埋まる。

### 石組（第6図、図版10）

集石9から集石12にかけての北側の崖面上部に石組を確認した。崖面は急で一部崩落しているが、ここ以外にも、北側の崖面上部ほぼ全体にわたって石組を施している様子を確認することができる。石組は南側の斜面には見られず、遺跡の北に位置する上山古墓群からの見栄えを考慮して施されたものではないだろうか。

## 2. 遺物（図版3~6・15~18）

調査により検出した遺物は、珠洲焼・刀子などである。ほとんどの遺物は表土を排除し集石を検出する際に出土した。その他、集石2から刀子、集石8から短刀、集石11から珠洲焼の擂り鉢・壺が出土した。また、昨年の分布調査では珠洲焼の擂り鉢・壺を採集した。以下、遺構ごと、図版ごとに遺物の特徴を述べる。

### 短刀・刀子（図版5・18）

遺構とともに短刀・刀子が出土している。図版5の1は短刀である。集石8の区画西側から、刃先を下に斜めに刺さった状態で出土した。全長33.9cm、刃長27.2cm、中子長6.7cmである。鍔の付着が多いが一部に木質部が残る。庵操作りで、刃先はふさる（下方に反る）。2は刀子である。集石2の表土を排除した際に出土した。全長27.3cm、刃長18.0cm、中子長9.3cmである。2点ともその特徴から平安後期から鎌倉期のものと考えられる。

### 集石11出土遺物（図版3・15）

図版3の19・20は集石11から出土した。19は珠洲焼の片口鉢で、20の蓋と考えられる。口径27.4cm、器高12.2cm、底径12.0cmである。ふくらみを持って立ち上がる器体を持ち、口縁外端はしっかりと面を取る。注口は口縁の外周線にコの字状に丁寧に作られている。内面におろし目はない。外底面に回転糸切り痕を残し、使用痕は認められない。黄灰色を呈し、焼きは良好である。珠洲焼の編年の中期に属するものと考える。20は珠洲焼の壺口縁である。口径22.0cmで玉縁状の口縁に沈線を施す。口縁部のみの出土で、全体形は不明である。同じく珠洲焼の編年の中期に属するものと考える。

### その他の集石出土遺物（図版3~6・15~17）

以下の遺物は表土を排除し集石を検出する際に出土したものである。集石上に散布しており原位置は保っていないが、同一個体の破片がある程度まとめて出土している。

図版3の22は集石26から出土した珠洲焼の壺の口縁である。口径は12.0cmで、口縁端部を嘴状に成形する。23は集石28から出土した珠洲焼の壺の口縁である。口径は29.6cm、口縁端部を嘴状に成形する。焼きはやや甘い。いずれも珠洲焼の編年の中期を下らない時期のものと考えた。

図版3の21・図版4の1~5・7は珠洲焼の鉢である。図版3の21は集石16・17周辺から出土した片口鉢である。半球状の器壁を持ち、口縁外端はしっかりと面を取る。内面にはロクロ成形による段が残り、おろし目はない。外底面に回転糸切り痕を残し、使用痕は認められない。灰黄褐色を呈し、焼きは良好である。珠洲焼の編年の中期に属するもの

と考える。図版4の1は集石29、2・5が集石27、3・4が集石30、7が集石24から出土した。1・2はいずれも口縁外端にしっかりと面を取る。3を除いておろし目は認められない。3はおろし目が曲線文で装飾的に施される。これらの擣り鉢も珠洲焼の編年のⅡ期を下らない時期のものと考えた。

図版4の6・8~18、図版5の3~16、図版6の1~9、図版16の①は珠洲焼の壺もしくは壺の体部破片で、集石上に散布していたものである。その他に、集石29・30周辺で近世、近代の遺物が出土している。

#### 平成11年度分布調査採集遺物（図版6・18）

昨年の分布調査で、集石29の周辺から遺物を採集した。図版6の16・17は集石29の崩落した崖面に露出しており、歳骨器と考えられる。16は珠洲焼の壺である。口径11.5cm、器高22.9cm、最大径17.1、底径8.1cmでいわゆる壺R種A類に分類される。全体がやや重心の低い倒卵形で、口縁は丸みを持ちながら外反するが、口縁端部でやや内湾し丸みを持った口縁を印象づけている。黄灰色の肌をなし、焼きは良好である。内外面にロクロ成形された痕跡が残り、外底面に静止糸切り痕を残す。頸部から胴上部に櫛齒状工具により一筆書きの2段の波状文が巡る。また、同一の工具で胴部から底部に左上から右下に綫方向の波状文が2列施されている。この裏側には胴上部の波状文に付けて綫方向の波状文が梵字のような書き方で施されている。珠洲焼の編年のⅠ期に属するものと考える。底部端は鋭く、使用痕は認められない。17は珠洲焼の片口鉢で16の蓋と考えられる。口径21.2cm、器高8.8cm、底径8.1cmである。こんもりとふくらみを持って立ち上がる器体を持ち、口縁外端でしっかりと面を取っている。注口は口縁の外周線にコの字状に丁寧に作られている。内面におろし目はない。外底面に静止糸切り痕を残し、使用痕は認められない。肌は緻密で灰褐色を呈する。珠洲焼の編年のⅠ期のものと考えた。18・19・20・21・①はいずれも珠洲焼で、18・20・21が甕、19・①は鉢の破片である。①は今年度出土した図版4の1と接合した。いずれも珠洲焼の編年のⅡ期を下らない時期のものと考えた。

#### 3. 洞穴（図版11）

円念寺山の北側の崖面に地元では古くから行者窟と考えられる洞穴があることが知られていたが、今回の調査で実際に確認した。洞穴は円念寺山遺跡の立地する尾根先端のやや西側の中腹に位置する。開口部を北東に向け、正面に上山古墓群を、眼下に護摩堂への道、郷川を望む。江戸時代、白心行者が穴の谷で修行する前に使っていたと伝えられる。

洞穴は、幅170cm、奥行は長辺200cm、短辺80cm、高さ110cmの方形で、開口部は斜めになり前方にテラスを作り出す。内部には、開口部の横の壁際に1辺50cm、深さ30cmの土壙が確認できる。壁面には最近のものと思われる落書きが多く見られるが、その中に当時のものと考えられる円形の彫り込みが確認できる。

崖面にはさらにいくつかの洞穴が存在する可能性が考えられる。今後、今回発見した洞穴の調査をはじめ、周辺の詳細な調査を行なう必要がある。

### (3) 分布調査（黒川地区穴の谷靈場周辺）

今年度は黒川村北東の穴の谷靈場周辺の分布調査と簡易測量を実施した（第5図、図版11）。調査は、富山大学人文学部国際文化学科考古学研究室の全面的なバックアップの下、調査担当者及び学生が行った。調査は、対象域を上山古墓群から穴の谷靈場周辺と靈場東側の自然歩道沿いの2地区に分け、それぞれ人為的に作り出された平坦面の観察を4班に分けて実施した。その結果、大小5ヶ所の平坦面を確認した。

平坦面13は、穴の谷靈場への参道周辺の平坦面を総称して名付けた。参道の山側に3ヶ所、谷側に1ヶ所あり、それぞれ大小の平坦面からなる。標高は参道付近で約120mである。規模は最大で約25×15m、最小で約10×2mである。谷側の平坦面は舌状の丘陵端部と谷地形からなり、開削して造成した平坦面やマウンドが確認できた。

平坦面14は、上山古墓群の北から穴の谷方面にのびる尾根上の古道に沿って確認される平坦面を総称して名付けた。標高は約90m～120mにわたり、規模は最大で約45×20m、最小で約4×2mである。一部に礎石と考えられる石が散見できる。

平坦面15は、塚跡東遺跡の北東約50m、平坦面13とは山頂を挟んで反対側に位置する平坦面である。標高は約90m、規模は約70×23mである。

平坦面16は、穴の谷靈場東側の尾根上の自然歩道に沿って確認される平坦面を総称して名付けた。標高は約120～175mにわたり、規模は最大で約20×10m、最小で約5×5mである。

平坦面17は、郷川に面する台形状の丘陵に位置する3ヶ所の平坦面を総称して名付けた。自然歩道から続く古道に沿って見られる。標高は約100m、規模は最大で約50×30m、最小で約10×10mである。

以上、分布調査の調査結果である。上山古墓群から靈場へ向かう尾根筋、靈場の参道沿いなど、穴の谷靈場周辺には大小さまざまな平坦面が点在していることが確認できた。今後はさらに範囲を広げて分布調査を行なう予定である。

## (4)まとめ

両遺跡についていくつかの検討を試みたが、その中で得られた見解を整理し、まとめに代えたい。

1. 日枝神社裏遺跡は、上山古墓群の西約50mに立地する。岡遺跡は穴の谷靈場に向かう道路をはさんでその入り口部分に一对で存在する。日枝神社は室町時代のはじめから存在したと伝えられているが、日枝社は修驗道と深くかかわるものと考えられており、この遺跡は立地的にも上山古墓群と関係があるものと考えられる。
2. 遺跡は、日枝神社の社域・畠を含めて大小17ヶ所に及ぶ平坦面である。調査は5ヶ所の平坦面を対象とした。遺構は、後世の土地利用によって全体に削平を受けているが、平坦面1で集石・礎石・土壌、平坦面2で集石・平坦面3で右列・集石・石垣状遺構、平坦面4で集石を検出した。
3. 平坦面1は、山地を開削して作り出された平坦面で、礎石・集石・土壌SK1・2が検出された。礎石・土壌の検出状況から少なくとも2時期存在することが確認された。SK1からは銅製の鉢・鉄釘・土師器皿・珠洲焼の甕などが出土した。何らかの施設があり、地鎮あるいは鎮壇などの儀式を行なった可能性を考えた。
4. 平坦面2は、大規模な盛土・整地を行なっており、造成以前と以後の2時期にわたって利用されていたと考えた。
5. 平坦面3で小砾と等間隔に並べられた4つの巨石からなる石列を検出した。集石4は、平坦面4に立地し、平坦面4と平坦面3をつなぐ石敷きの通路である可能性を考えた。
6. 出土遺物は、土師器皿・須忠器・珠洲焼・越中瀬戸などである。年代は、珠洲焼の編年でV期のものが出土しており、日枝神社が室町時代のはじめから存在したとする伝承を裏付けることとなった。
7. 円念寺山遺跡は、上山古墓群の南、標高約80mの円念寺山の尾根上に位置し、大小3ヶ所の平坦面からなる。遺跡からは、上山古墓群や伝承真興寺を一望するほか、東に鶴居を仰ぐ。また尾根の先端からは、西に富山平野・富山湾を遠望することができる。平坦面1から尾根の先端にかけては集石が連なる。平坦面2・3は畑作による削平を受けるものの、崖際には畝状に集石が残っているのが確認された。
8. 集石は、積石をするもの、墳丘状の盛り上がりを持つもの、方形に区画するものなどが確認できた。また、地下施設として石槨を持つ集石が確認され、同様の石槨が露出しているものが見られた。これらの集石群・石槨は、集石墓あるいは経塚である可能性を考えられる。
9. 遺跡の北側の崖上部に石組を確認した。一部崩落しているものの、崖上部ほぼ全体に石組みを施していると考えられる。南側には見られず、遺跡の北側に位置する上山古墓群からの見栄えを考慮したものだと考えた。
10. 出土した遺物は、珠洲焼・短刀・刀子である。珠洲焼はすべて編年のI期からII期に収まるもので、短刀・刀子は平安後期から鎌倉期のものである。のことから、遺跡の年代は12世紀後半を中心と考えられる。これは上山古墓群の造営開始時期と重なり、今後上山古墓群とも絡めた検討が必要である。
11. 円念寺山の北側の崖面で行者窟と考えられる洞穴を確認した。洞穴は、円念寺山の尾根先端からやや西側の中腹に位置し、護摩堂へ向かう道・郷川に面する。方形の小規模なもので幅170cm・奥行200cm・高さ110cmを測る。江戸時代に白心行者が修行していたと伝えられる。
12. 穴の谷靈場周辺の分布調査と簡易測量を行なった結果、穴の谷靈場周辺には大小さまざまな平坦面が点在していることが確認された。上山古墓群から靈場へ向かう尾根上、靈場の参道沿い、靈場のある谷の東側の尾根上などで人為的に作り出された平坦面を確認し、一部では礎石と考えられる石やマウンドなども散見された。
- 以上であるが、今年度までの調査で黒川を含む周辺一帯には多くの遺跡が存在し、それらが密接なつながりを持っているものと考えられた。引き続き調査を継続し、全体像を明らかにしたい。

## 引用・参考文献

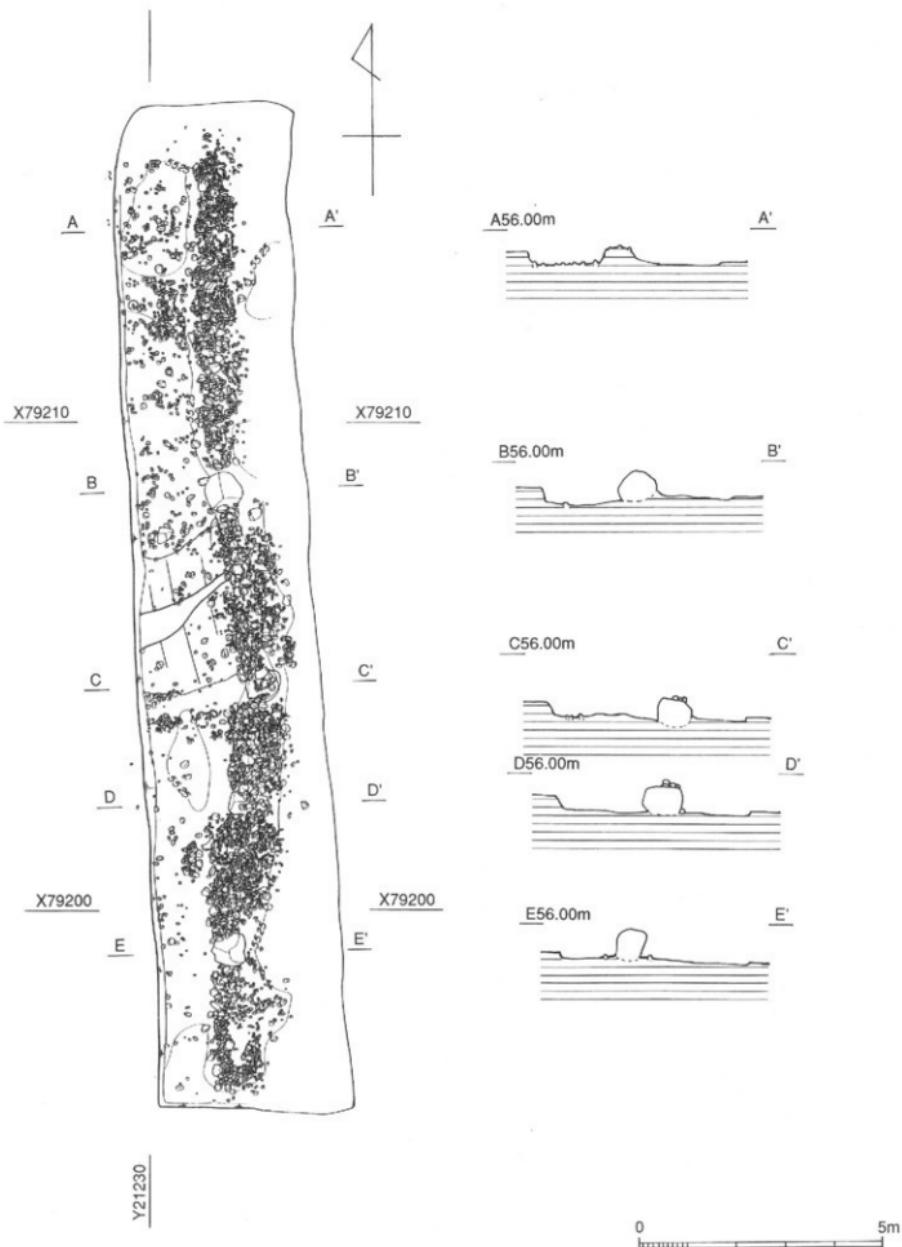
- ア 宇野隆大・西井龍儀他 1993 「第二章 医王の山と里の遺跡を探る」『医王山文化調査報告書 医王は語る』  
福光町・医王山文化調査委員会
- カ 鎌田 勉 1997 「岩手県内の経塚の検証 2-経塚の造構と墳墓の造構-」『岩手考古学会』9号  
上市町 1970 『上市町誌』
- 上市町教育委員会 1995 『當山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』
- 上市町教育委員会 1997 『富山県上市町黒川上山古墓群第2次発掘調査概報』
- 上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群第3次発掘調査概報』
- 上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群第4次発掘調査概報』
- 上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群第5次発掘調査概報』
- 久保智康 1999 「中世・近世の鏡」 『日本の美術394』 至文堂
- 神戸市教育委員会・神戸市健康教育公社 1984 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ』
- サ (財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)一東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ-』
- 静岡県考古学会 1997 『静岡県における中世墓』 静岡県考古学会シンポジウム1996年度
- 関 秀夫 1985 『経塚』 ニュー・サイエンス社
- 関 秀夫 1990 『経塚とその遺物』 『日本の美術292』 至文堂
- タ 東京国立博物館編 1985 『那智経塚遺宝』 東京美術
- 富山県 1984 『富山県史 通史編Ⅱ 中世』
- ナ 奈良国立博物館編 1977 『経塚遺宝』 東京美術
- ハ 兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1985 『莊園・館・経塚』 兵庫県埋蔵文化財調査事務所展示会図録2  
北陸中世土器研究会 1994 『中世北陸の寺院と墓地』 第7回北陸中世土器研究会資料
- マ 見附市教育委員会 1977 『小栗山不動院裏山経塚群 新潟県見附市小栗山不動院経塚発掘調査報告書』
- 宮田進一 1988 『越中瀬戸の窯資料(1)』『大境』第12号
- 『密教大辞典』 1931 法藏館
- ヤ 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館



第1図 日枝神社裏遺跡遺構全図 (縮尺 1/300)

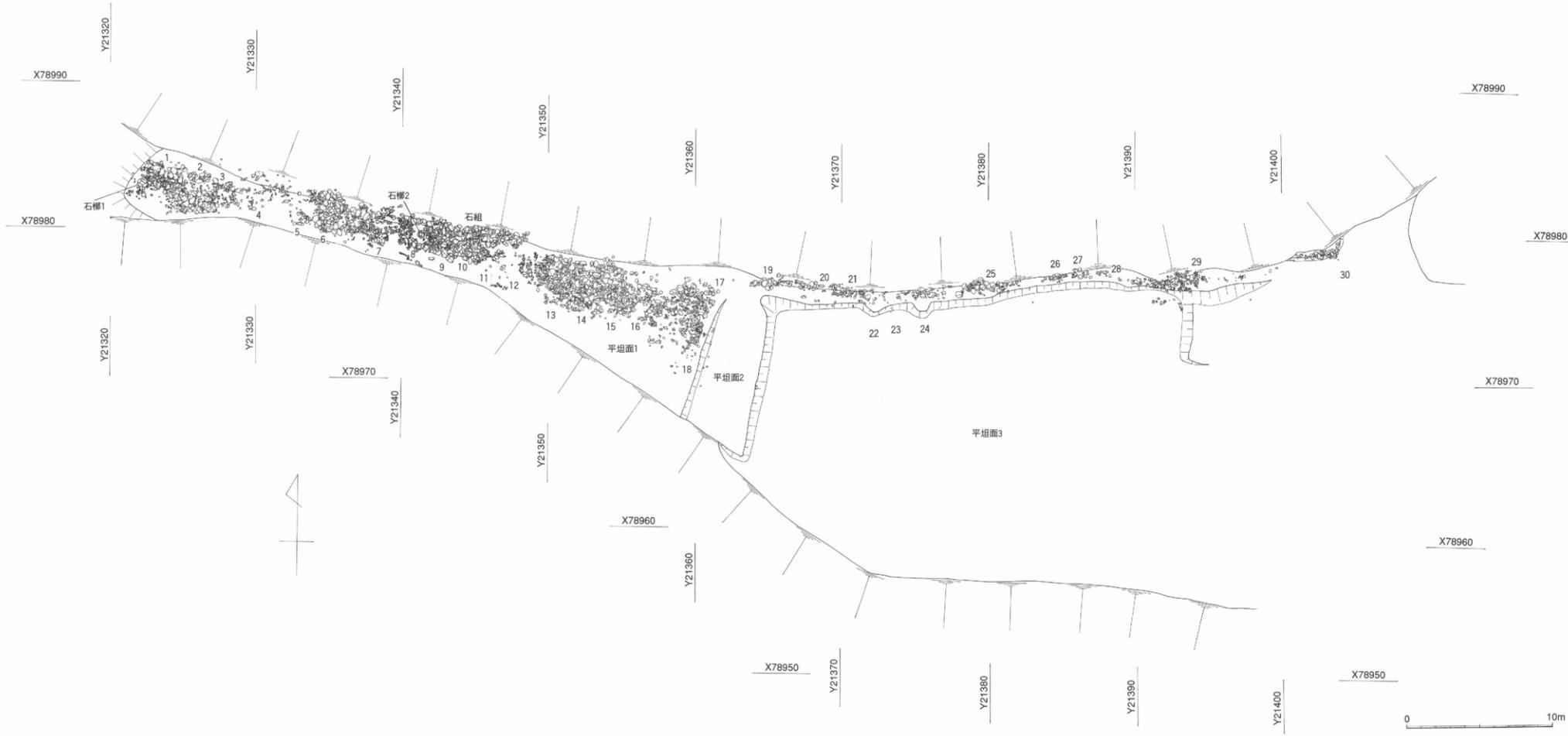


第2図 日枝神社裏遺構遺構実測図 (縮尺 1/100) 平坦面1・SK1

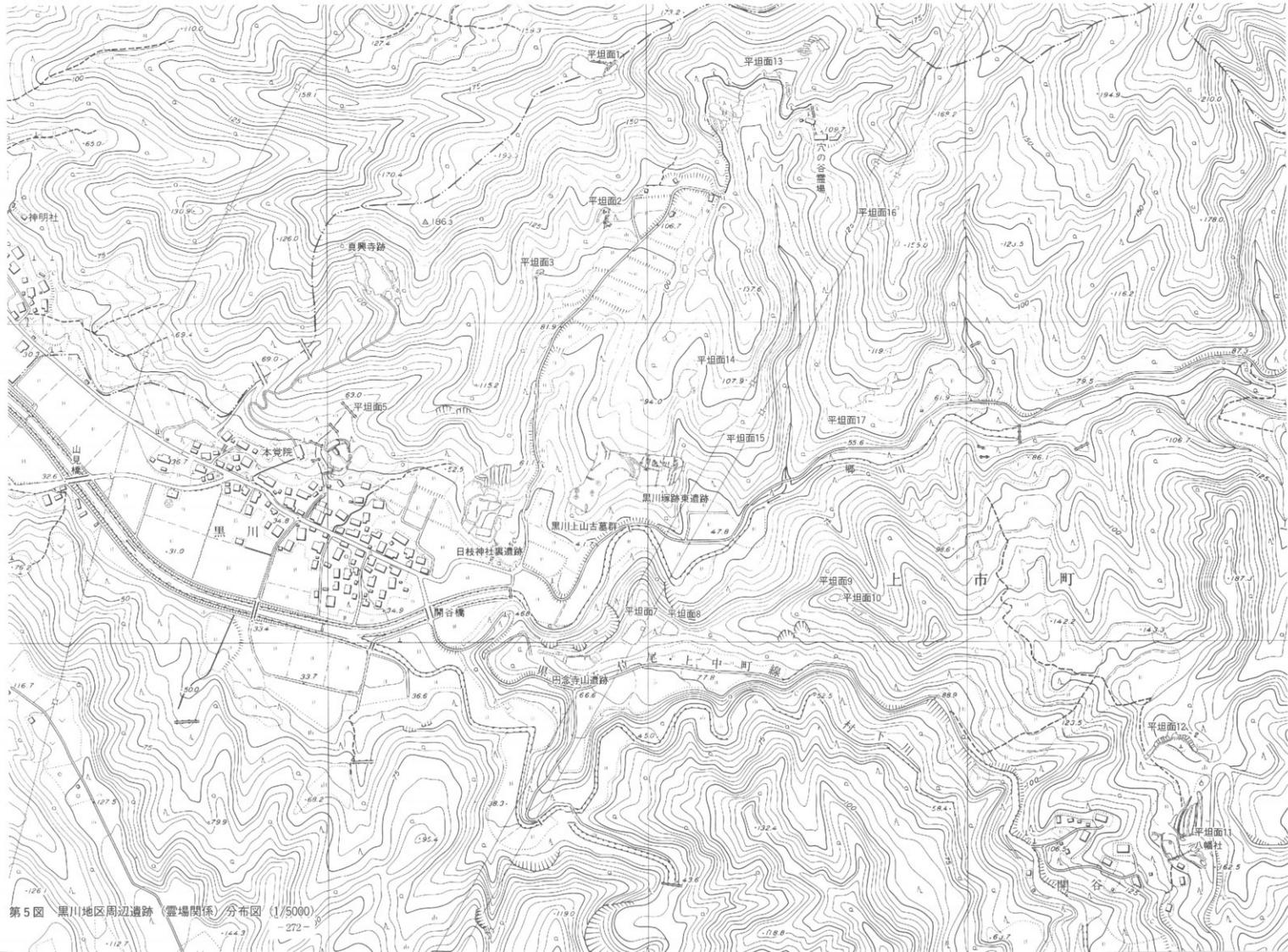


第3図 日枝神社裏遺跡遺構実測図（縮尺 1/100） 石列

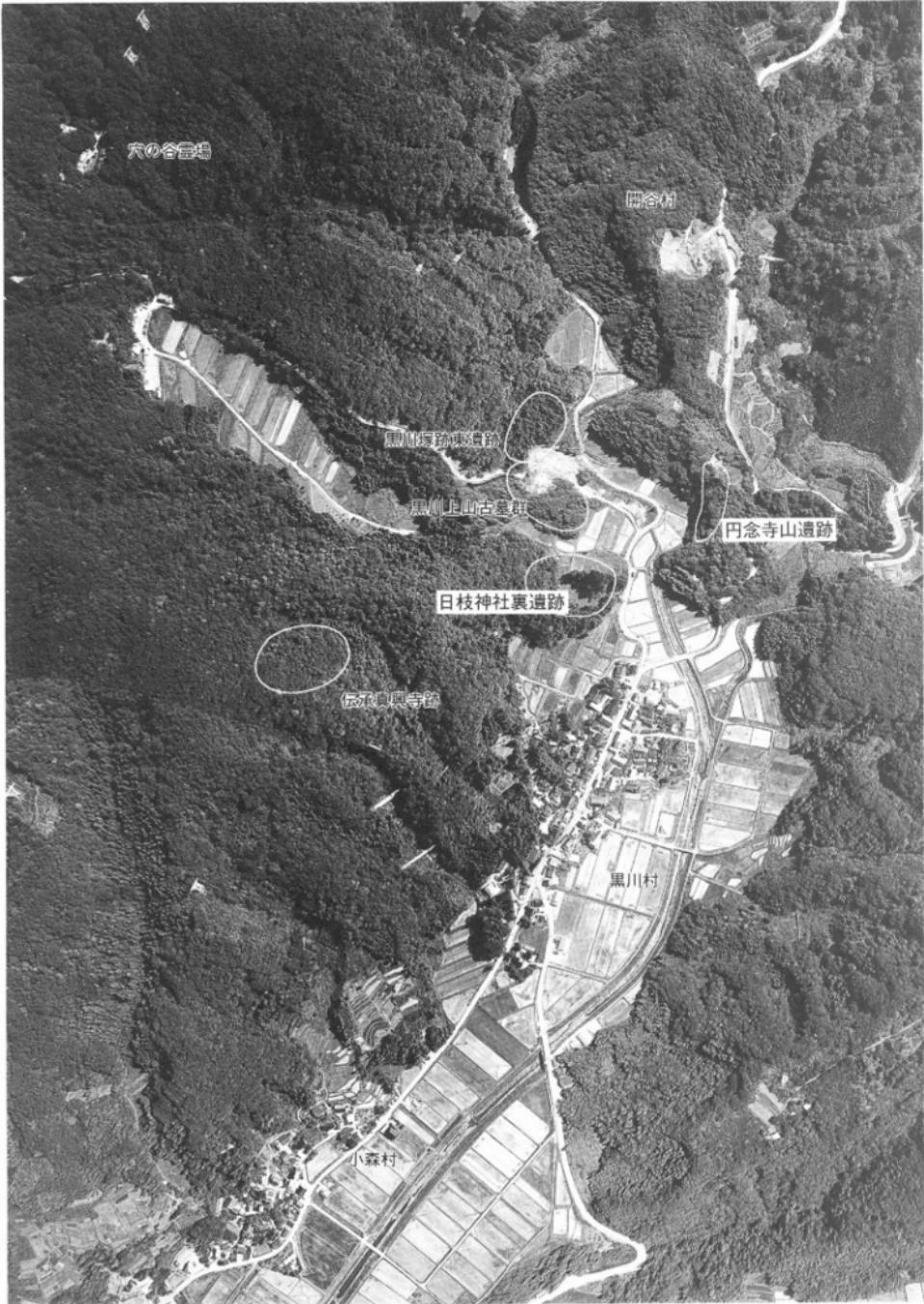




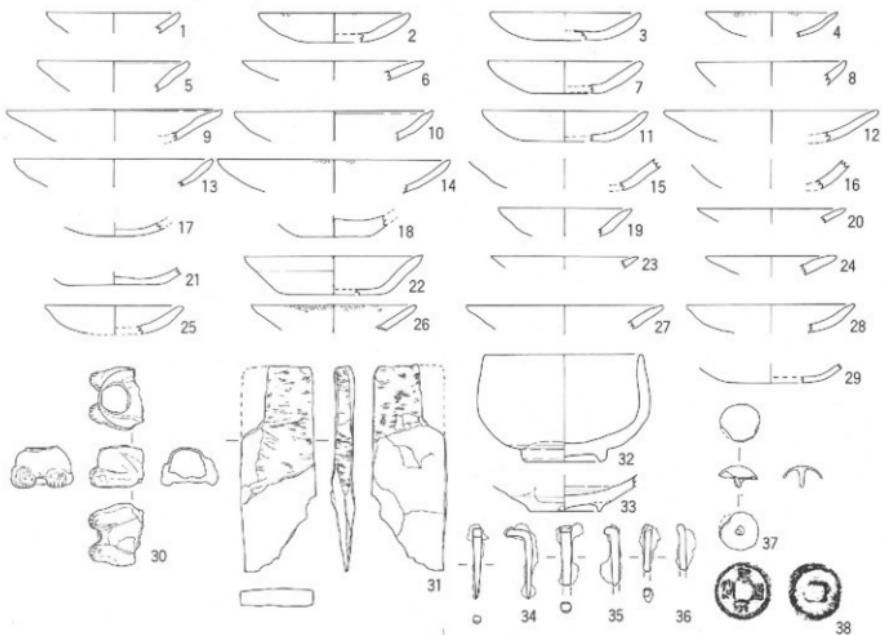
第4図 円念寺山遺跡遺構全図（縮尺 1/200）



第5図 黒川地区周辺遺跡（霊場関係）分布図 (1/5000)

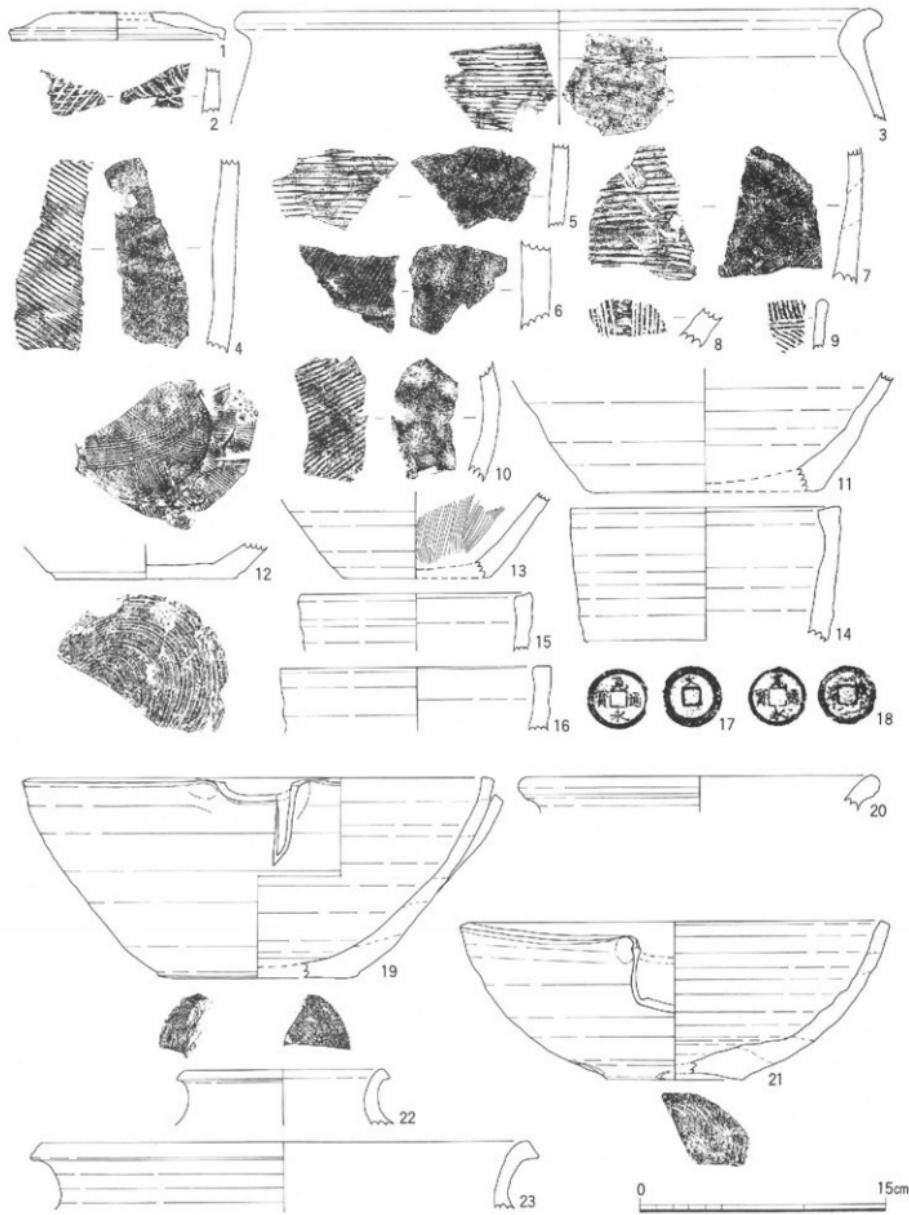


図版1 日枝神社裏遺跡・円念寺山遺跡周辺航空写真（約1/6,000）



図版2 遺物実測図 (縮尺 1~36:1/3, 37・38:1/2, 39:1/4)

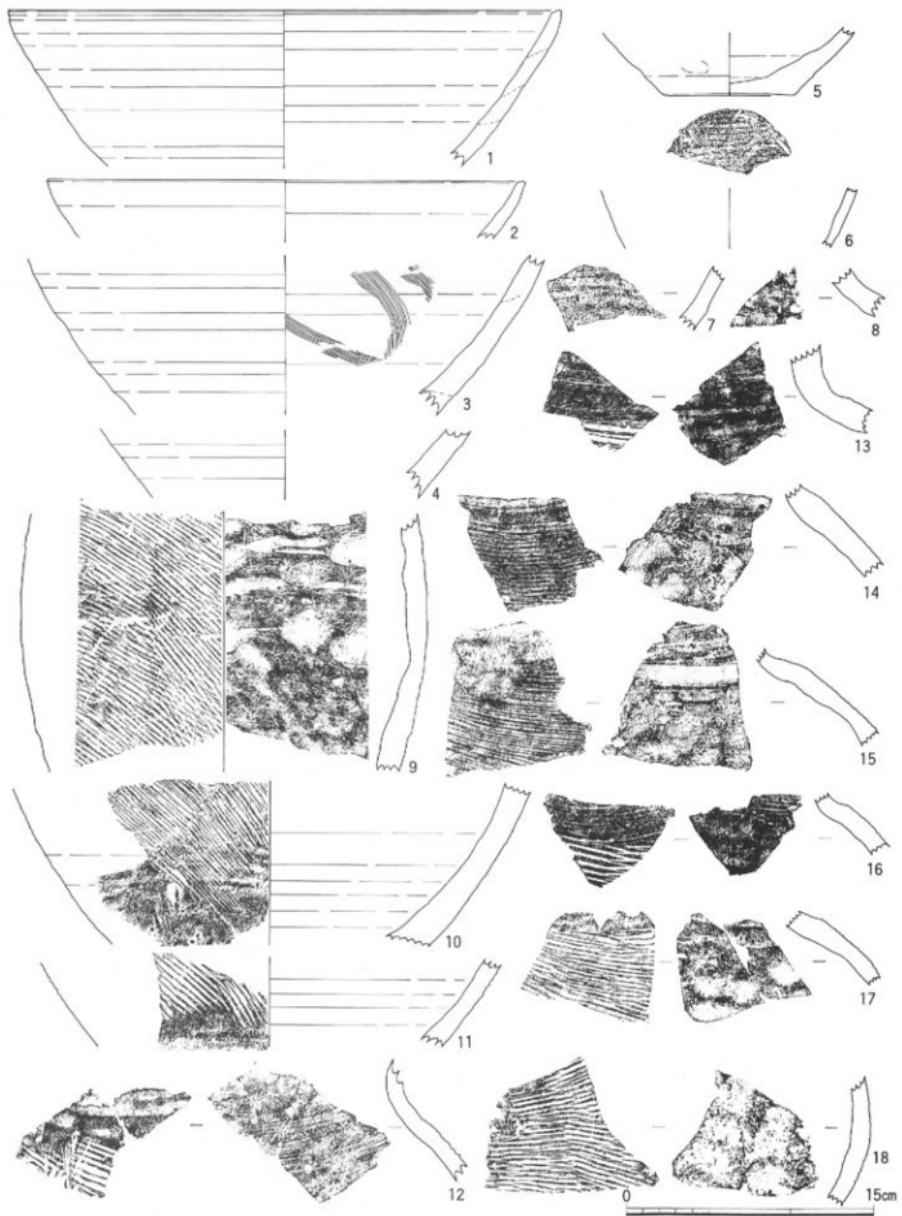
日枝神社裏遺跡：平坦面1(1・2・4~6・9・10・16・18・30), 集石1(3・7・8・11~15・17), 平坦面2(19~21), 平坦面3(22~24), 平坦面4(26・27), 平坦面5(25), 集石3(33), 集石4(32), SK1(28・29・34~39), 表採(31),



図版3 遺物実測図 (縮尺 1・2・4~16・19~23:1/3, 3:1/4, 17・18:1/2)

日枝神社裏遺跡: 平坦面1 (3~7・10~14・17), 集石1 (6~8・15), 平坦面3 (1~2・9・16・18)

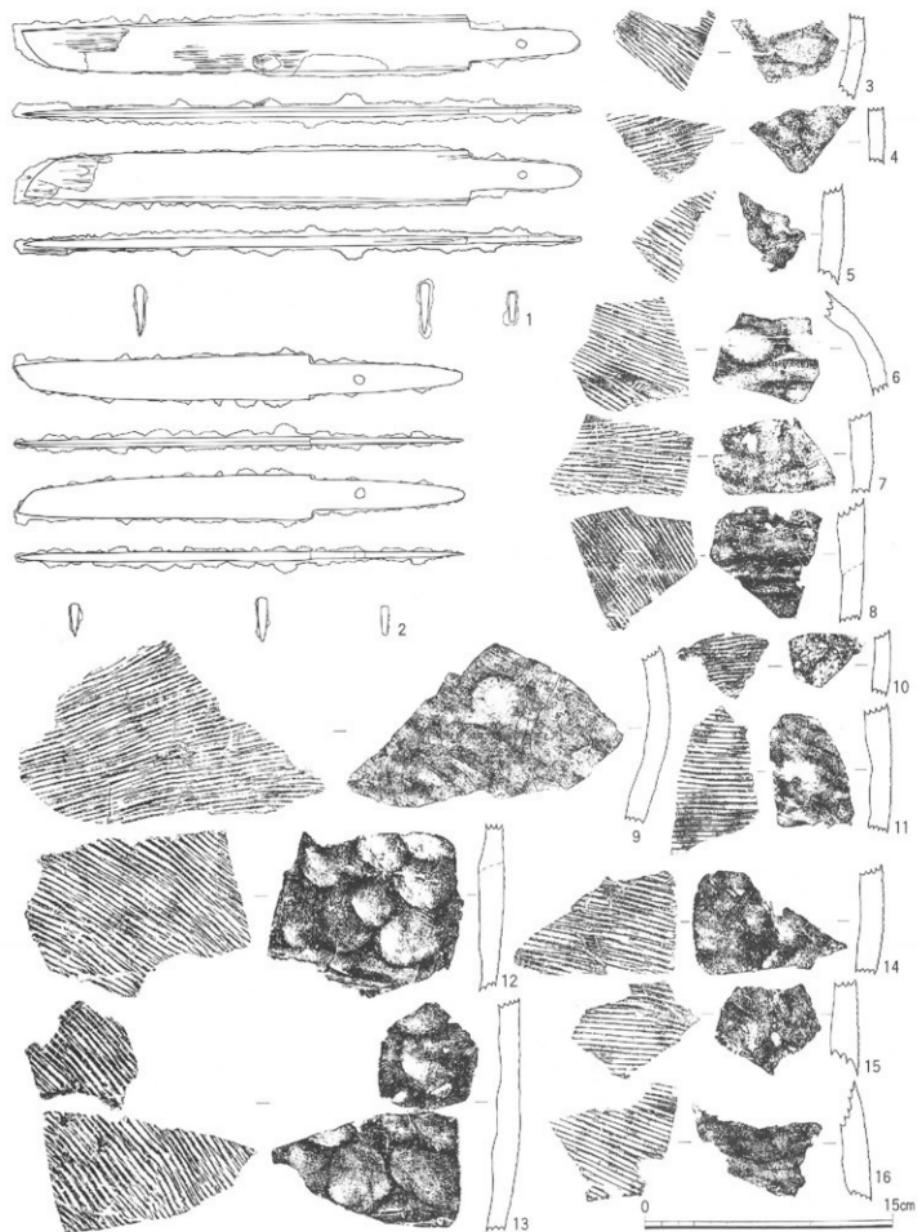
円念寺山遺跡 : 集石11 (19~20), 集石16~17 (21), 集石26 (22), 集石28 (23)



図版4 遺物実測図 (縮尺 1/3)

円念寺山遺跡：集石13（8），集石16（9・14），集石20（12・18），集石21（10・15），集石24（7・11・16），集石27（2・5・6），

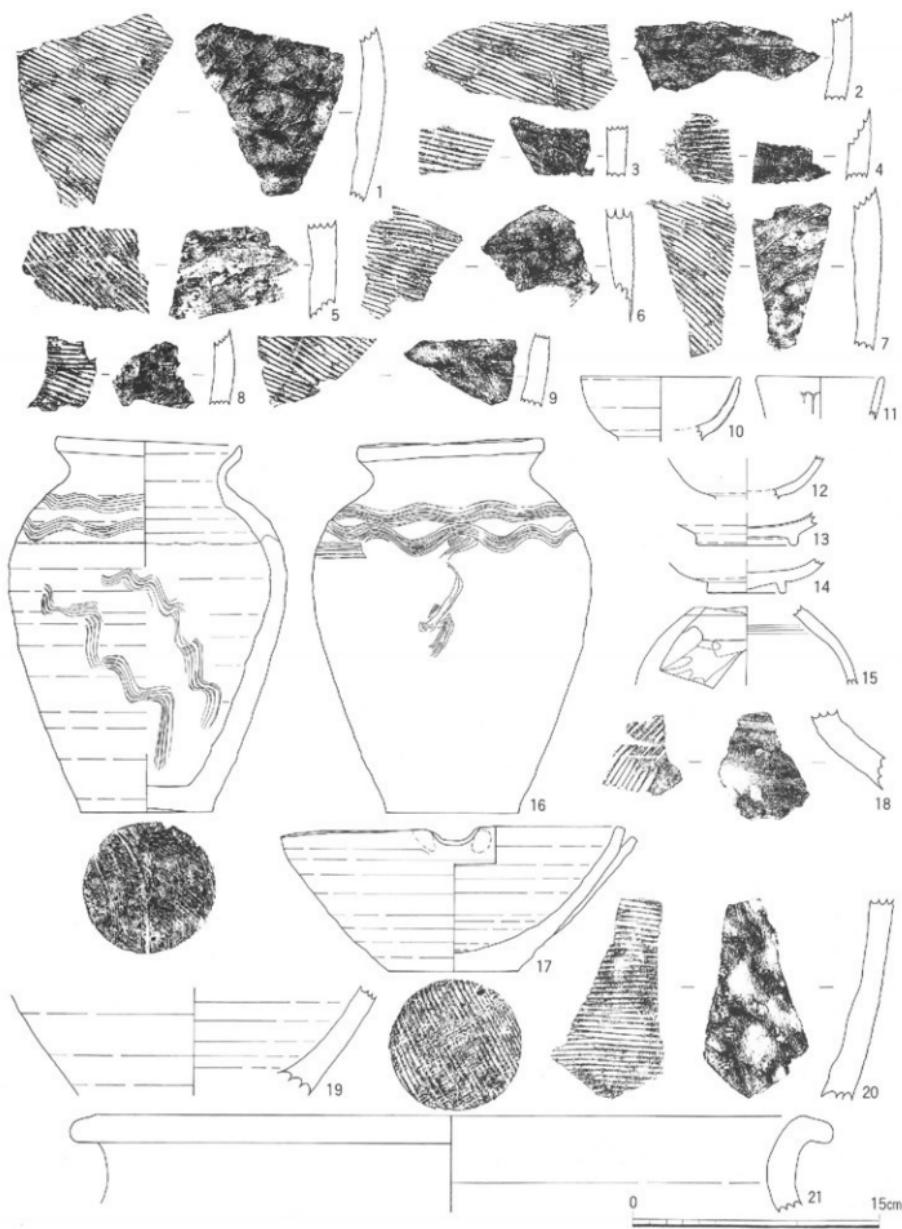
集石29（1・13），集石30（3・4），平坦面1（17）



図版5 遺物実測図 (縮尺 1/3)

円念寺山遺跡：集石2（2），集石8（1），集石19（6），集石20（3・4・7），集石24（9・12～14），集石25（8・10），

集石29（11・15・16），平坦面2（5）



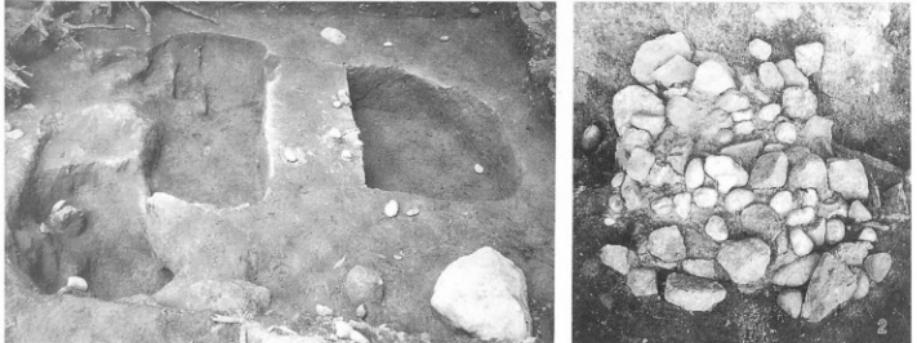
図版6 遺物実測図 (縮尺 1/3)

円念寺山遺跡：集石29（1～9・12），集石30（10・11・13～15），平成11年度分布調査採集遺物（16～21）



図版7 日枝神社裏遺跡

1.遺跡全景（東より・空中写真），2.平坦面1（北東より），3.石列（南西より）



図版8 日枝神社裏遺跡

1.SK 1(南より)、2.集石 3(南より)、3.集石 1(北より)、4.平坦面2造成土断面(東より)、5.集石 4(南より)、  
6.作業風景